

# 教員養成における「海外教育研究」科目の実践と課題 －平成27年度「台湾」における実践－

藤谷元子\*・周東和好\*\*・北條礼子\*\*\*

(平成28年9月9日受付；平成28年11月21日受理)

## 要 旨

上越教育大学国際交流推進センターでは、単位修得を伴うプログラムである「海外教育（特別）（実践）研究」を実施している。平成27年度後期には、初めて台湾での「海外教育（特別）（実践）研究」を実施した。本論文は、プログラムの現地学習の部分に当たる国立嘉義大学附設実験小学校での英語による日本文化に関する授業実践、体育授業実践及び大学における学生間交流を概観し、現地学習が受講生の国際理解に及ぼした影響を検討した。分析の結果、現地学習は、受講生の外国語運用意欲をより高め、日本以外の国・地域およびその住民との友好関係をより深める可能性が認められた。

## KEY WORDS

international understanding 国際理解 Taiwan 台湾 pre-service training 教員養成研修 in-service training 現職教員研修 language activities at elementary school 小学校外国語活動 practice of Physical Education 体育授業の実践 Dance class ダンス授業

## 1. 背景と目的

### 1.1 はじめに

近年、世界各国におけるグローバル化が進み、大学においては、相互理解や友好親善を視野に入れた従来の国際交流に加え、世界的に通用する人材としての国内のグローバル人材の育成が急務になっている。中山（2015）は、大学における国際交流の場面として、①留学生とのキャンパスでの日常的な交流（チューターなどを含む）、②授業やゼミにおける外国人ゲストとのキャンパスでの交流、③国際交流を目的とするサークル等の任意団体での活動、④大学が主催する短期海外語学研修などの海外での交流、⑤交換留学などの単位取得を伴う海外での交流、⑥ゼミなどで企画する海外スタディーツアーやフィールドワークでの交流、を挙げている<sup>(1)</sup>。

本学国際交流推進センターでは、海外での交流として、協定校の交換留学や短期間で海外の文化に触れさせることを目的とした短期海外研修プログラムの他、独自の単位修得を伴うプログラムを実施している。それが、学部及び大学院（修士課程、専門職学位課程）を対象に行っている「海外教育（特別）（実践）研究」<sup>(2)</sup>、大学院（修士課程、専門職学位課程）を対象に行っている「海外（実践）フィールド・スタディー」である。本論は、「海外教育（特別）（実践）研究」の内、平成27年度（2015年度）後期に実施した「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）について述べるものである。

### 1.2 「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）科目開設の経緯

ここでは、本科目開設の経緯について述べる。

平成18年10月に本学は台湾の国立嘉義大学と提携を結んだ。この提携に伴い、本学は平成19年7月から9月まで嘉義大学の林明煌教授を提携校からの外国人研究者として受け入れた。たまたま林教授が人文棟3階の筆者（北條）の隣室の研究室に滞在しており、分野がその当時の筆者の関心分野に近いこともあったことから、お話をすることが数回あった。その際、筆者（北條）が長年台湾の小学校英語教育の授業を参観したいと希望していたことを林教授に伝えた。平成21年度にゼミ生であった院生1名と共に、林教授の紹介の下、国立嘉義大学附設実験小学校（以下、附属小学校という）を初めて訪れた。附属小学校の授業を参観させていただくためには、約1ヶ月前に予約をする必要があるとのことであった。このときは、附属小学校だけではなく、普通の公立小学校の英語の授業参観も林教授にお願いし、附属小学校の近くの林森小学校での参観も可能になった。附属小学校の国際交流担当の先生にも直接お会いして、次回からは直接メールで英語の授業参観を依頼してもよいとの回答が得られた。翌年も、別のゼミ生1名と共に附属小学校を訪問し、英語の授業を参観した。当時、同校は3年生から習熟度別の英語の授業を実施していたが、4

\*国際交流推進センター \*\*芸術・体育教育学系 \*\*\*人文・社会教育学系

階に英語学習教室が4室設置され、専任の英語教員がそれぞれ割り当てられた教室で授業を行うこととなっており、習熟度別に分かれた児童が英語教室に来ることになっていた。英語教員の英語力ばかりでなく授業力も素晴らしいので、参観するだけでも本学の学生の勉強になると考え、もう少し学生を連れてきてよいかどうかを聞いてみたところ、教育実習ベースで15名まで受け入れが可能であるとの返事が得られた。翌年から、北條研究室のゼミ生が中心となり、日本文化を英語で紹介する授業を教育実習と同様に実施させていただけることになり、平成25年度まで毎年継続して附属小学校を訪問した。毎回、訪問前に、準備した授業内容であるパワーポイントのファイルを送付し、実践希望学年を伝え、附属小学校のコーディネータが学年と日程を設定してくれた。附属小学校を訪問すると、毎回本学のために会議室が控え室として準備されていた。英語の授業参観の後にも必ず反省会が開催され、授業を実践した英語教員から授業の目標や工夫などの説明があり、本学の学生は質問をする機会が得られた。我々の授業実践の前日にはリハーサルの時間が設定され、その教室の担当の英語教員がリハーサルを見た上で授業を改善するためのアドバイスを提供してくれた。授業実践時にも必ず、英語教員が同席し、毎回の授業実践後には反省会が開催され、英語教員からのコメントも得られた。本学の学生にとって学ぶことが多く、英語を用いてのコミュニケーションを図る機会でもあり、筆者（北條）も大変学ぶことが多い交流となった。これまで学生が考案し、実践した日本文化を紹介する授業の内容は、「かなの成り立ち」、「日本の伝統行事」、「日本の伝統的な遊び」、「相撲」、「浴衣」などであるが、どの授業実践も座学だけに終わらない児童参加型の実践になるようにした。

平成26年度に、引率者が自らの定年が近づき、このまま附属小学校との交流が途絶えてしまうのが大変残念であるとの思いから、本学国際交流推進センターに「海外（特別）（実践）研究」としての附属小学校での教育実習を提案した。本学から、受け入れが可能であるかどうか交渉してくるようにとの運びになり、平成26年11月10日から14日までの4日間、同校を訪問し、校長と英語教員全員と本学側3名とで検討会が開かれた。附属小学校から、例えば3年間だけという短期間なら断るが、長期間と言うことであれば引き受けるとの回答が得られ、「海外（特別）（実践）研究」が開始されることになった。

平成27年度の附属小学校における教育実習を含む「海外（特別）（実践）研究」は、本学の履修科目としての第1回目のものである。

### 1.3 本研究の目的

本研究の目的は、「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）の概要を総括し、課題を見出すことである。具体的には、当該講義の成果と課題、そして現地学習が受講生の国際理解に対して及ぼした影響について検討する<sup>註2)</sup>。

## 2. 「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）の実践

### 2.1 「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）の概要

「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）は、選択科目であり、上越教育大学における事前学習、台湾での現地学習及び帰国後の事後学習の三部から成り立っている。学部生には「海外教育研究C」（台湾）、大学院（修士課程）生には「海外教育（特別）研究C」（台湾）、大学院（専門職学位課程）生には「海外教育（実践）研究C」（台湾）という科目名でそれぞれ開講している。授業の到達目標・テーマは、「外国での短期間の生活を通じて、その国の教育の実態及びその背景をなす文化に直接触れ、自国とは異なる教育の制度・内容等の理解の深化を図り、教育者として必要とされる広い視野や高い見識及び豊かな人間性の育成を図る」としている。

平成27年度の「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）における事前学習は平成27年10月から開始し、翌年2月末までおおそ週1回のペースで、半期の授業として実施した。台湾での現地学習に参加した受講生は12人であった。

台湾での現地学習は、附属小学校での学校見学、附属小学校の英語の授業参観及び授業実践（日本文化に関する授業三つと体育授業一つ）と嘉義大学における大学生間の交流、及び台北での文化研修で構成された。3月7日に嘉義に到着し、8日に附属小学校を訪問し、学校・授業見学及び授業実践を行った。9日は嘉義大学のコーディネータ及び日本語を話すことができる学生3人と共に阿里山を訪問し、10日に大学キャンパスを訪れ、複数学部の学生らとの交流を持った。10日の午後には嘉義を離れ、11日は台北にて九份、新北投温泉、故宫博物院見学等の文化研修を行い、12日に帰国した。

事後学習として、受講生は帰国後、各自の報告書を作成し、平成28年4月27日に本学にて報告会を約1時間行った。

### 2.2 附属小学校での日本文化に関する授業実践

附属小学校では、英語による日本文化に関する授業実践が行われるが、その概要は以下の通りである。

平成27年10月8日、「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）の第一回目の授業が行われた。内容は、本学の国際交流推進センターの事務を担当する研究連携課国際交流チーム職員による事務的な説明を含んだオリエンテーションがなされた後、筆者（北條）によって附属小学校の教育の特徴や台湾の教育事情の講義がなされ、今後の授業計画が示された。13日は、授業実践のための班作りが行われた。受講生それぞれが授業実践を希望するテーマを述べ、興味が近い者同士が同じ班になる形で班結成が行われた。同月20日から、英語による授業実践の準備が始まった。その後、授業実践のテーマを班ごとに決定し、授業実践での授業の構成を考え、使用するPowerPointファイルも作成していった。三つの班が構成され、それぞれのテーマは「妖怪」、「日本の学校」、「はなかつぱ」であった。また、早い段階で小学校で英語で実践する授業はどのようなものか雰囲気をつかむため、27日は、平成27年9月に実施した「海外教育（特別）（実践）研究A」（オーストラリア）の授業実践のビデオを視聴しつつ、参加者に授業内容等の解説及び注意点等を話してもらった。また、11月10日は、過去に行われた北條研究室のゼミ生による附属小学校での授業実践のビデオを視聴した。その他、文化研修の準備として台湾の雰囲気をつかむためのビデオ視聴も行った。

11月24日から12月にかけては、受講生らに部分的に授業内容を説明してもらう機会も設けた。12月22日に授業実践英文スクリプトの提出期限を設け、藤谷が修正したのち、北條及び本学Brown准教授が確認し、必要な部分を再度修正した。年末年始の時期に全面的な書き直しを指示したグループもあった。平成28年になってからは、各グループはリハーサルを実施し、その結果を振り返り、授業内容の細かい部分を変更していった。ネイティブ・スピーカーによる視点の重要性を考え、少なくとも各グループ一回は本学Brown准教授の立ち会いの下、リハーサルを行った。

3月8日、附属小学校での研修では、校舎内の見学、児童による絵画の説明、児童によるパフォーマンスを見学した後、まず2時限分附属小学校の教員の英語の授業を受講生全員で見学した。最初の1時限はStone Soupという東洋に広く伝わる題材を基にした教材を主に使用した授業で、次の1時限はアニメ『ドラえもん』等も活用した異文化理解にも配慮した授業であった。その後、各グループがそれぞれ1時限分、授業実践を行った。授業実践後は、附属小学校の教員らからその実践に対するコメントに加え、附属小学校の英語授業の重要な点についての解説及び質疑応答等の時間が設けられた。

## 2.3 附属小学校での体育授業実践

本項では、附属小学校において実施された体育授業の実践について、当日までの経緯を含めて実践概要と成果を報告し、今後の課題について述べたい。

### 2.3.1 経緯と本講義での事前準備

#### 2.3.1.1 経緯

体育授業では、けがの防止を含めた安全面の課題が常に必要となる。ここでは、国外の学校で動きを伴う体育授業を実施することについて、どのような経緯をもって実践できるに至ったのかを述べておきたい。

本講義の受講生らが当該の小学校において体育授業を実践できる状況に至るには、前年度の平成26年11月10-14日に実施された事前打ち合わせ、および平成27年3月9-13日に実施された予備的訪問における筆者らからの働きかけがあった<sup>註3)</sup>。この予備的訪問では、これまで同小学校において北條研究室の活動として行われてきた教室内での英語を用いた日本文化に関する授業に加えて、周東研究室によって日本的な体育授業が実践された。この体育授業では筆者（周東）が主たる教師として授業を実施したが、同行した保健体育に所属する大学院生2名（小学校の現職教員院生）が補助に入った。この授業を受けた現地児童らの反応や授業の様子から、我々の体育授業に関する同小学校の担当教員の理解を得ることができ、本講義における体育授業の実施が可能となった。

この予備的訪問時に実施された体育授業は、筆者（周東）の「長なわとび」の学習プログラム<sup>註2)</sup>に基づくものであった。このプログラムでは、多くの学習者が達成し易い課題から始まり、その課題で達成された経験をもとに次の課題に取り組む、というように徐々に課題が発展し、技能が高まるように配列されている。参加した当該小学校の児童らは夢中になって集中して取り組み、課題を達成した際には皆で喜ぶという様子であった。この取り組みを見ていた体育授業の担当教員は、子供たちが楽しくかつ技能が高まるように取り組んでいる姿に感心していた。

先に「日本的な」体育授業と述べたのは、「長なわとび運動」が日本において極めて発展していることや日本の学校体育としても十分実践されていること、他国の体育授業ではあまり取り組まれていないことなどの背景<sup>註4)</sup>からである。当該小学校の児童、教師らの授業後の言動を踏まえると、日本の体育授業らしさと言えるものを感じ、日本文化あるいは授業が実感されたものと思われる。これらのことから、その翌年度に実施される本講義における体育授業の実践について事前に理解を得ることができた。

#### 2.3.1.2 事前準備

前項で述べた経緯を踏まえ、本講義ではオリエンテーションの際に、体育の授業も実施できる旨を受講生らに告げた。学生AとBの2人が体育授業を実践することを決めたが、この2人は学部3年生であり、一人は「保健体育」、



もう一人は「英語」の所属であった。2人とも中学校および高等学校教諭保健体育免許状の取得を希望し、これまでに筆者（周東）が担当する「中等保健体育科指導法（課程論）」および「同（授業論）」を含め、保健体育の専門領域の講義の履修を進めていた。このように体育授業の実践にあたり、ある程度の準備のある学生らであった。

2人の学生は当講義のオリエンテーション後に、ダンスの授業を行うことを決めた。そして間もなく、選曲（Good Time<sup>③</sup>）と曲の長さの編集、振り付けを行い、指導教員の筆者（周東）に振り付け案を示し、その出来栄えについて助言を求めた。筆者は数か所の修正点について指摘したが、編集された曲の長さは適当であり、足のステップ、腕の振り、弾みなどの振り付けは、動きのバランスもよく考えられており、小学生を対象とするダンス授業で取り組みやすいと思えるものであった。その後、動きの指導について、始めに約1分30秒のダンスの全体像を示範し、その後、いくつかのパートに分割したダンスを分習で指導し、いくつかのパートを組み合わせながら、最終的に全習へと導き、完成させるという指導計画を立てた。

このような計画に基づいて約40分間の授業案を作成し、それに沿って説明や指示する言葉を英語で作成し<sup>⑤</sup>、本講義の受講生らを児童に見立てて、模擬授業を2回実施した。この模擬授業を踏まえて、説明や指示する言葉、示範の仕方、授業の進め方などに修正を行った。

ここで特筆したいのは、足のステップを伝えるために学生らが工夫した資料である。学生の一人が左右の靴を模写したカードを左右の手に持って児童らの前で同じ方向を向いて頭上で示し、足のステップを見えるようにしたことである。このことにより、後方の児童も足元の動きを把握することができるようになった。

### 2.3.2 ダンス授業の実践

ダンスの授業は下記の通り実施された。この授業を実施する前の時間に、当該小学校に勤務する英語のネイティブ・スピーカーである英語科担当教師の前で、授業案および説明や指示語の事前作成資料に基づいて、実際に話しながらリハーサルを行った。この時に、大きな修正はなく、発音の確認が行われた。

授業実践：平成27年3月8日6校時（40分間）

対象：附属小学校 4年生 児童29人

場所：3階ユーティリティスペース

（校舎の3つの棟がY字型につながっている隣接部に設けられた広いスペースで、壁を背にする階段2段の高さの仮設舞台が設けられている空間）

授業者：学生Aおよび学生B

授業は授業案で予定した通りに、その内容の全てを時間通りに遂行することができた。無論、怪我も発生しなかった。児童らはダンスすることに慣れていない様子で、始めは動きが小さかったが、次第に動けるようになり、授業の終末部で完成形として輪になって踊った時に、そのクライマックスでは児童らの気持ちの盛り上がりで動きに表出し、終わった直後に児童ら自らと参観していた嘉義大学の学生らから大きな拍手が生じた。

### 2.3.3 学生らの報告から読み取る学び

以下に示す学生らの最終レポート<sup>④</sup>の記述から、学生らにおける学びを読み取りたい。

#### 学生Aの記述

「2つの反省点がある。一つは、40分間の授業で…子供たちをずっと立たせて常に動きのある授業をしてしまった。…午後の授業だったため、子供たちは疲れがあったようで、ずっと立ってられず、途中で座ってしまう子がいた。もう少し効率よく、休憩を含めた授業を考えるべきだったと思った。…二つ目は、説明中子供たちにあまりいい反応が見られなかったことだ。分かりやすいように作成したフリップを用いながらゆっくり、子供たちの反応を見ながら説明したつもりだったが、うなずきなどの様子が見られず説明をしていて不安な気持ちになった。もう少し子供たち同士で話し合ったり考えさせたりするような活動もあったらよかった…全体を通して、子供たちの笑顔もたくさん見ることができ、楽しい授業ができたと思う。…非常に貴重な経験であると思った…大きな経験として少し成長することができたと思う。台湾も日本も子供たちの様子はあまり変わらなかった。…子供たちに興味を持たせること、自身で考えさせること、子供たち同士を関わらせること、これらのことを大切にして、これからの実習や採用試験に活かしていきたい。」

#### 学生Bの記述

「最も気を付けたことは可視化することだった。日本語でも言葉だけでは伝わりにくいので、足の動きが分かりやすいように、手を足に見立てて説明することや、どのパートを練習しているのかということもわかりやすいように示すことを工夫した。小学校実習で感じた指示する時の可視化の大切さを活かすことができて良かった。…反省点とし

では、覚えた英語が緊張して抜けてしまい、手元の資料で確認した部分もあった…もっと子供たちを見ながら説明したかった。…子供が疲れて座ってしまうこともあったので、普段どのくらいの強度の運動を行っているのか、休憩の有無などについて事前に聞いておけば良かったと思った。英語でダンスを教えて何より楽しいと感じ、あつという間に40分が過ぎた。共通言語が英語のため、子供たちとは簡単な日常会話しかできなかったが、一緒に体を動かし、一つの表現を完成させることで、楽しい時間を過ごせること、体育授業の素晴らしさを実感することができ、とても貴重な経験となった。」

二人に共通して述べられている反省点は、授業の40分間、児童を座らせることがほとんどないまま授業を進めたことであり、説明の際に座らせるなどによって随時身体を休ませて回復させる必要があった、ということである。

また、伝わる英語によって授業を進めたものの、子供たちの反応をはっきりと読み取れないまま授業を進めたことも共通する反省点である。理解できたか否かの問いかけも計画されており、実際に発問したが、その際の子供たちの反応に基づいて再度尋ねたり、確認したりすることができなかったということである。一方、両学生とも、子供たちの様子から「楽しい体育授業を行うことができた」ことを感じており、そのことから「貴重な経験をすることができた」「体育授業の素晴らしさを実感した」と述べており、反省点を見出しつつも、今回の実践が自身にとって貴重な経験となったことを報告した。

「子供たちに興味を持たせること、自身で考えさせること、子供たち同士を関わらせること、これらのことを大切にして、これからの実習や採用試験に活かしていきたい」（学生A）、「小学校実習で感じた指示する時の可視化の大切さを活かすことができて良かった」（学生B）と述べている。これらの記述は、今回の授業実践が単独で完結するものではなく、これまでの授業実践に関する経験を踏まえた上で、今後控えている中等教育実習を含めた将来の自身の授業実践へとつながる経験として認識されている証左である。学部3年生の両学生にとって、英語によって体育授業を実践したことは、そのことだけの経験に留まるものではなく、今後始まるであろう教師歴に影響する貴重な経験となったものと言えよう。

#### 2.3.4 体育授業の実践に関する今後の課題

今後の課題として、次のことが挙げられる。今回の附属小学校での授業参観は、英語授業に限られた。そのため、体育授業班の学生らは、この小学校で体育授業がどのように行われているのかについて参観することなく、体育授業を実施した。そのため、児童らがどの程度動くことができるのかを把握できないまま授業を行うこととなった。また、前項で触れた反省点も含めて、授業実践を2回行うことができれば、1回目の授業を踏まえて授業の進め方を微調整し、2回目の授業を実施することができる。学生の経験や学びを深めるためにも、体育授業の参観と授業実践を2回実施することについて、今後、附属小学校に事前に申し入れし、実現する必要がある。

#### 2.4 大学における学生間交流

3月9日の概要は、嘉義大学側のコーディネータである蔡氏の他、嘉義大学からは男子学生2人、女子学生1人が参加した。日本人学生は嘉義大学生と日本語で交流しつつ、阿里山の自然及び文化を体験した。往路では、嘉義大学卒業生の一家が経営する茶園の茶畑や阿里山森林鉄道の駅も見学した。阿里山散策路では、グループに分かれ行動した。散策路一周の所要時間は1時間ほどであった。

3月10日の概要は、午前中を使用しての嘉義大学蘭潭キャンパス訪問であった。自然豊かで広大なキャンパスの中、最初に、映画KANOと嘉義農林学校での野球を記念して造られた展示スペース（KANO野球メモリアルセンター）を見学した。階下では、KANOにちなんだ製品や大学で独自に開発した製品が販売されていた。11時から約1時間、「留学ワークショップ」が実施された。嘉義大の学生は、さまざまな学部から数十人参加した。嘉義大の国際交流担当の大学教員も同席する中、嘉義大・上越教育大の紹介がそれぞれ行われ、次に、両大学の学生の自己紹介が英語で行われた。両大学の学生は小グループに分かれ、交流を楽しんだ。本学の学生の中には、簡単な中国語を話してみる者もいた。

### 3. 現地学習が受講生の国際理解に関して与えた影響

この項では、現地学習の前後において実施した質問紙調査の結果と考察を述べる。

#### 3.1 方法

実施時期：1回目は平成28（2016）年3月7日、2回目は同年3月12日

対象者：科目の受講生で単位修得者12人

表1 受講生の国際理解に関して与えた影響の調査質問項目

1. 日常会話程度ならば、英語などの外国語で話すことができる。
2. 多くの外国人と友達になりたいと思う。
3. 世界平和の維持に務めている機関を支援したい。
4. 国際的なボランティア団体の活動内容に興味はない。
5. 地球の砂漠化現象のメカニズムを理解したい。
6. 貧しい国の人ならば、意見が軽視されることがあってもやむをえない。
7. 海外にいったら、地元の人の習慣に触れたいと思う。
8. 世界の自然を守るために活動している国際機関を支援したい。
9. 外国人と仲良くすることには抵抗感がある。
10. 自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる。
11. 外国語で書かれた新聞や雑誌には関心がない。
12. 世界平和の維持に関心がない。
13. 各国に見られる独自の習慣を尊重したい。
14. 廃棄物による土壌・水・大気の汚染状況についてしりたい。
15. 外国の伝統芸術をすばらしいと思うことがある。
16. 他国の文化を理解したいと思わない。
17. 生まれた国や人種によって、待遇が異なるのはおかしいと思う。
18. 各国の発言権は、その国の経済状態に応じて、与えられるべきだと思う。
19. 地球温暖化を防止するために、二酸化炭素などの排出を抑える努力をしていきたい。
20. 異なる文化に触れることは、興味深い体験だと思う。
21. 外国人とは距離をおいて付き合いたい。
22. 第三世界の子供たちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい。
23. 外国人から英語で話しかけられたとき、答えることができない。
24. 出身国によって待遇に差があってもやむをえないと思う。
25. ある民族が他の民族より劣っていると絶対に考えてはいけないと思う。
26. 英語などの外国語で書かれた新聞や雑誌が読める。
27. いろいろな国の人たちと知り合いになるのは楽しい。
28. 外国人とはあまり話をしたくない。
29. 青年海外協力隊などの国際的なボランティアには参加する気になれない。

質問紙の構成：

事前調査は6段階尺度形成29項目から構成されている。この項目は鈴木ほか（2000）の先行研究<sup>(5)</sup>で作成された国際理解測定尺度を翻案したものである（表1）。事後調査は事前調査で使用した29項目の他に、相川（2007）の先行研究<sup>(6)</sup>での国際理解の程度と修学旅行プログラムの関係を調べる質問項目を翻案し、加えた。

### 3.2 分析結果

本論文での分析は、鈴木ほか（2000）の先行研究で作成された国際理解測定尺度を翻案した29項目について扱う。国際理解に関する29項目各項目について、事前・事後それぞれ平均値と標準偏差を求め、*t*検定を行った。その結果を、以下の表2に示す。

29項目のうち、表2にも見られるように、「3. 世界平和の維持に務めている機関を支援したい（*t*(11)=2.35, *p*<.05)」、「11. 外国語で書かれた新聞や雑誌に関心がない（*t*(11)=2.35, *p*<.05)」については、事前調査と事後調査の間に有意な差が認められた。また、「1. 日常会話程度ならば、英語などの外国語で話すことができる（*t*(11)=2.03, *p*<.10)」、「2. 多くの外国人と友達になりたいと思う（*t*(11)=2.17, *p*<.10)」、「23. 外国人から英語で話しかけられたとき、答えることができない（*t*(11)=2.14, *p*<.10)」、「28. 外国人とはあまり話をしたくない（*t*(11)=2.16, *p*<.10)」については、事前調査と事後調査の間の差に関して、有意傾向であった。

### 3.3 考察

分析結果から、以下の点が考えられる。

第一に、受講生は、現地学習への参加により、参加前よりも外国語運用意欲が高まったと考えられる。外国語の運用に関しては、聞く・話すだけではなく、新聞や雑誌等、実用的なものを読むことに対する意欲向上も認められる。第二に、受講生は、現地学習に参加して、参加前よりも、日本以外の国・地域やそこに住む人々に対し、友好的な態度が促進されたと考えられる。



表2 受講生の国際理解に関して与えた影響の調査結果

	事前 (n=12)		事後 (n=12)		t
	M	SD	M	SD	
1. 日常会話程度ならば、英語などの外国語で話すことができる。	3.58	1.16	4.17	0.94	2.03 <sup>†</sup>
2. 多くの外国人と友達になりたいと思う。	5.00	0.74	5.50	0.67	2.17 <sup>†</sup>
3. 世界平和の維持に務めている機関を支援したい。	4.83	1.03	5.17	0.83	2.35*
11. 外国語で書かれた新聞や雑誌には関心がない。	2.25	0.75	1.92	0.79	2.35*
23. 外国人から英語で話しかけられたとき、答えることができない。	3.00	1.54	2.25	1.22	2.14 <sup>†</sup>
28. 外国人とはあまり話をしたくない。	1.67	0.89	1.25	0.45	2.16 <sup>†</sup>

(<sup>†</sup>p<.10, \*p<.05)

#### 4. まとめと今後の課題

本研究は、「海外教育（特別）（実践）研究C」（台湾）について、科目開設の経緯と実践の概要を総括し、附属小学校での四つの授業実践に関する成果と課題を検討した。そして、現地学習が受講生の国際理解に関して与えた影響を分析した結果、受講生は、現地学習への参加により、外国語の運用意欲を高める可能性が認められた。また、日本以外の国・地域やその住民に対する友好関係を深めることへの関心の向上が認められた。

今後の課題として、現地学習の授業実践において、その機会を1回のみでなく、2回は行える環境を受け入れ先との協力により、整えていくことが挙げられる。また、現地学習が受講生の国際理解に関して与えた影響の調査について、質問項目の検討と、調査の範囲を、現地学習だけではなく、事前学習および事後学習も含めて実施することが挙げられる。さらに「海外教育（特別）（実践）研究」科目の台湾以外での分析も課題である。

#### 註

- 1) この科目は学部と大学院において各々「海外教育研究」（学部）、「海外教育特別研究」（大学院修士課程）、「海外教育実践研究」（大学院専門職学位課程）として開講されている。本論ではこれらをまとめて「海外教育（特別）（実践）研究」と表記する。
- 2) 本論は著者ら三人により構想され、執筆にあたっては、1.2項を北條が、2.3項を周東が、それ以外を藤谷が主に担当した。本研究で示された意見は筆者ら個人のものであり、本学国際交流推進センターの統一的な見解を示すものではない。
- 3) 本講義「海外教育研究（台湾）」は平成27年度の講義として実施されたが、これまで本学と国立嘉義大学との交流協定に基づくフォーマルな教育プログラムは実施されていなかった。この実施に向けて、前年度の平成26年11月に本学から国立嘉義大学に事前打ち合わせに赴いた。その時の訪問者は、本論の筆者である北條と周東および事務担当者の3人であった。この事前打ち合わせを踏まえ、同年度の平成28年3月には、北條研究室及び周東研究員の活動として、「海外教育研究（台湾）」を見据えた附属小学校への予備的な訪問が実施された。
- 4) 背景として、授業展開の仕方に関する台湾における体育授業との違いも考えられる。例えば、台湾での体育授業において、授業始めに口頭で長めに行われるセーフティーインフォメーション（安全指導）である。台湾の他の小学校の体育授業でも同様に行われており、授業を進める上での必須の指導項目のように位置付けられている。日本では活動のその都度に行われたり、授業の展開や課題の示し方によって考慮されたりするのが一般的であるが、このことは本論の直接的な目的から外れるのでここまでに留めたい。
- 5) 授業実践英文スクリプトの作成については、前項2.2に示された日本文化に関する授業班と同様に行われた。

#### 引用・参考文献

- (1) 中山京子（2015）「大学における国際交流実践－ゲームとの交流活動－」, 日本国際理解教育学会編著『国際理解教育ハンドブック－グローバル・シティズンシップを育む－』明石書店, pp.181-186.
- (2) 近藤和久・周東和好・伊藤政展（2015）「中学校の体づくり運動における長なわとび運動が生徒の集団凝集性と運動有能感に及ぼす影響」, 上越教育大学研究紀要第34巻, pp.265-274.
- (3) Carly Rae Jepsen, Owl City（2012）Good Time.
- (4) 上越教育大学国際交流推進センター（2016）『海外教育（特別）（実践）研究C報告書』
- (5) 鈴木佳苗・坂元 章・森津太子・坂元 桂・高比良美詠子・足立にわか・勝谷紀子・小林久美子・檀淵めぐみ・木村文香（2000）「国際理解測定尺度（IUS2000）の作成および信頼性・妥当性の検討」, 日本教育工学会論文誌23(4), pp.213-216.
- (6) 市川 充（2007）「高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果」, 東京学芸大学紀要総合教育科学系58, pp.81-90.

# Practice of “Studies of Overseas Education” as Pre-service and In-service Training for Teacher Education

## – Challenge for “Studies of Overseas Education (Taiwan)” from 2015 to 2016 –

Motoko FUJITANI\* · Kazuyoshi SHUTO\*\* · Reiko HOJO\*\*\*

### ABSTRACT

This study aimed at examination of the implementation of the lesson which is named “Studies of Overseas Education (Taiwan)” from 2015 to 2016. It also aimed at finding effects of Study Trip on students as participants.

This study reviewed two types of lesson preparation and implementation by participants in “Studies of Overseas Education (Taiwan)”: Japanese culture and Dance. The “Studies of Overseas Education (Taiwan)” has three steps for participants: Preparation for lesson implementation of Study Trip, Study Trip and Presentation by participants in order to report their achievement. The main stages of Study Trip were National Chiayi University and Affiliated Experiment Elementary School of National Chiayi University.

In order to find effects of Study Trip, *t*-test was conducted. As a result, first, Study Trip would motivate students' command of foreign languages. Secondly, it would also enhance their friendly attitudes to foreign countries/areas and their inhabitants.

---

\* International Exchange Center    \*\* Music Fine Arts and Physical Education    \*\*\* Humanities and Social Studies Education